

## 大空小学校の教育を伝える

表題は朝日新聞9月24日朝刊「be フロントランナー」木村泰子さん。「大阪のオバチャンです」。映画「みんなの学校」を見た名古屋市立八王子中学校の生徒たちに明るく話した。

林京香さんファミリーや地域の障害者団体、名市大などが共催して、映画「みんなの学校」を観て、語り合う集いを計画している。タイミングよく記事が掲載されたので、抜粋して紹介したい。



特別支援学級で3年間、1日1～2時間しか学校にいられなかったA君。前の学校から「やられたらやり返す、話を聞かない」と引き継ぎのあった不登校の転校生B君。「障害」や「問題」をかかえたこんな子どもたちが、普通学級でみんなと机を並べ、ごく自然に溶け込んでいく。



初代校長を9年間務めた大阪市立大空小学校では、魔法のようなできごとが起きた。その様子に1年間密着取材した映画「みんなの学校」(真鍋俊永監督)が昨年公開されると、子どもの障害、いじめ、不登校に悩む親、教育関係者らに反響が広がった。定年退職した今、上映会や講演に全国を駆け回り、「大空の教育」を伝える。

大空小学校の理念は「すべての子どもの学習権を保障する学校をつくる」。木村さんの言葉では「重い障害があろうと、家庭が貧困であろうと、暴力を振るう子であろうと、どんな子も、その子らしくいられる学校に」となる。

そのために「たった一つの約束」がある。「人にされていやなことはしない、言わない」。破ったら、子どもは担任と話し合ってから、校長室で報告する。

大空小を早くから取材した関西テレビの迫川緑さんは「徹底した子どもファースト」と木村さんを評する。学校は一般にメディアの取材に慎重だが、最初の電話で「なんぼでも見においで」と言われた。広く知られることが子どものためになるなら、大人の事情は後回しなのだ。取材を引き継ぎ、映画を製作した夫の真鍋俊永さんは「保護者や地域の人が学校に足を運ぶ機会を増やし、一緒になって子どもを育てる雰囲気を作る。コミュニケーション力は天性のもの」と言う。

当の木村さんは「大空小でできたことは、全国どこでもできる」と話す。「大空のような学校で学んだ子どもが、社会を変えていくはず」との願いを込めて。

(2016年9月27日)